

令和元年第3回定例会一般質問 会議録（抜粋）

令和元年9月20日

1 子どものやる気スイッチ等の心へのアプローチを行う教育施策の重要性について

○松本議員

まず子どものやる気スイッチ等の心へのアプローチを行う教育施策の重要性についてですが、前定例会の質問において、本市は夢の実現と学ぶことがリンクしていない児童が多いという課題を踏まえ、学ぶことへの動機付け、即ちやる気スイッチ、そのモチベーションの維持、そしてそれを発揮できる環境の3要素が必要であるということは共通認識とさせて頂きました。

ある名言がございます。「普通の教師は言わなければならないことを喋る。良い教師は分かり易いように解説する。優れた教師は自らやってみせる。そして本当に偉大な教師というのは、生徒の心に火をつける。」というウィリアム・アーサー・ウォードという人物の言葉です。

この名言が示すように、知識へのアプローチは勿論のこと、本市の課題から、やる気スイッチなどの心へのアプローチがまずもって重要なのではないのでしょうか。これについてどうお考えかお聞かせ下さい。

～略～

○嶋野議長

教育次長

○北野教育次長

「児童・生徒をやる気にさせるための教員のアプローチの重要性に係る認識」についてお答えいたします。

本市の児童・生徒の学力状況を分析すると、従前より学習意欲に大きな課題が見られます。児童・生徒をやる気にさせる、すなわち学習意欲が向上すれば、児童・生徒は自発的に課題を捉え学習を進めていくことができるため、児童・生徒の学力向上のためには、学ぶことの動機付けを行うための教員のアプローチが重要であると捉えております。

これまでも、教員は児童・生徒をやる気にさせるために、悩みや困り感に寄り添い丁寧に声かけを行ったり、今やるべきことを明確に伝え叱咤激励するなど、児童・生徒一人ひとりの特徴も考慮し、また教員それぞれの特徴も活かしながら様々なアプローチを行い、学習意欲を高めることができるように取り組んでいるところでございます。

～略～

○嶋野議長

松本議員。

○松本議員

これ以降は一問一答形式でお願いします。

まず心へのアプローチを行う教育施策の重要性ですが、市としても心へのアプローチが重要と認識していると理解しました。

ただ実践となると難しいものです。なぜなら、心のアプローチは人によって様々な解釈が可能だからです。例えばやる気スイッチにつながる褒め方でも目標へ進む経過を評価するのか、結果のみを評価するのかで全く異なるものになります。教員によって心のアプローチが異なれば、児童も混乱するでしょう。教員同士も困惑するでしょう。

よって教員による効果的な心のアプローチを方向付ける全体の共通認識が必要であると思いますが、どうお考えかお聞かせ下さい。

○嶋野議長

教育次長

○北野教育次長

議員のご指摘の通り、教員によって児童・生徒の心へのアプローチのポイントがバラバラであると児童・生徒も困惑することから、教育委員会としても共通認識が必要ではないかと考えております。

この夏に市内全教職員が参加した小中学校全体研修会では、北海道教育大学の横藤学校臨床教授にご講演いただき、学級経営や学力向上のポイントとしてアメリカの心理学者であるマズローの「欲求5段階説」を用い、子どもの学習意欲を高めるための「承認欲求」を満たすことが重要であるという話をさせていただきました。

この「承認」すなわち「児童・生徒の存在や行為に至った経緯を認める」ということは、生徒指導の「自己有用感」を育むことや、愛着課題がある児童生徒に対しての支援方法、授業づくりの中で児童・生徒同士が互いに評価しあう際にも用いられ、重要であると捉えております。

教育委員会といたしましては、このように「児童・生徒の存在や行為に至った経緯を認める」ことなど共通認識のテーマにできるかを検討し、取り組みを進めてまいりたいと考えております。

○嶋野議長

松本議員。

○松本議員

是非とも共通のテーマ、共通認識を作成されることを要望します。

これがあれば各学校間の情報共有の円滑化、教員への研修の一貫性、教員間のノウハウ蓄積など、よりよい心のアプローチが組織的にできます。この共通認識に基づく施策

は効果的であると思いますが、どうお考えかお聞かせ下さい。

○嶋野議長
教育次長

○北野教育次長

ご指摘の通り、児童・生徒の学習意欲を高めるためには、共通認識のもと取り組みを行うことで、目標が焦点化され効果が高まると期待できます。

教育委員会といたしましては、共通認識のもと、学力向上や支援教育、集団づくりなどの各分野で一貫した教員研修や、継続した教員研修を行うことを検討してまいりたいと考えております。

○嶋野議長
松本議員。

○松本議員

是非、検討し取り組んでいただければと思います

また他にも心のアプローチに関する具体的施策があります。その一つが義務教育学校です。昨年、会派で守口市のさつき学園という義務教育学校を視察しました。この義務教育学校は小中一貫校と異なり1年生から9年生という扱いによる一貫性を追求した学校となります。このさつき学園では、児童・生徒の成績向上、中一ギャップの解消などの様々なメリットがあるとの説明を受けました。

なぜこのようなメリットづくしなのかという理由は、この義務教育学校が、児童・生徒のやる気スイッチ、モチベーションの維持、適切な環境の提供の3要素を満たしかつ効果的に取り組む事が可能だからであります。これについてどのようにお考えかお聞かせ下さい。

○嶋野議長
教育次長

○北野教育次長

義務教育学校では、小学1年生から中学3年生までが同じ施設内で学び、9年間を見据えた教育活動を行えることが最大のメリットと考えております。

具体的には、例えば中学生が小学生に算数の学習内容を教えるという取り組みを行った場合、小学生は優しく接してくれた先輩の姿に憧れ、「こんな中学生になりたい」という気持ちが芽生え、中学生にとっては後輩から頼られ、常に憧れの目で見られているという意識から、自己有用感が育まれると期待できます。

このような教育活動が、同じ施設内であることにより、継続的に行いやすくなり、よ

り効果的に児童・生徒の意欲向上につなげることができないかと考えております。

他にも、教員が共通認識のもと9年間を見据えた継続的な支援が行えることがあり、児童生徒の学ぶことの動機付けや維持等を実現させるメリットも多くあると捉えております。

○嶋野議長
松本議員。

○松本議員

改めて義務教育学校の良さを理解しました。3要素を効果的に活用できるため、結果、学力向上につながっていると考えます。

是非、子ども達のため、これらの心のアプローチの教育施策について実践し、さらに効果の高い義務教育学校も鋭意研究し、学力の課題解決とより魅力ある教育に取り組むよう要望致します。

令和元年9月21日作成